

四期一六年間にわたって北海道のトップに座ってきた高橋はるみ知事が勇退することが決まった。

知事選へ五選出馬するのか、参院選にくら替えするのか。高橋知事は、自民党連会長で農相の吉川貴盛氏と神経戦を繰り広げてきた。吉川氏は、過去の衆院選で対立候補を応援された経緯などから、高橋知事と距離があり、知事選に新人の擁立を目指していた。一方、高橋知事は去就を明らかにせず、一部マスコミが「五選出馬せず」と報道した際は、別のマスコミにはその報道を否定し、五選出馬への意欲を語っていた。

吉川氏の新人擁立が進展しない中、高橋知事は昨秋、小さな会合にもこまめに顔を出して挨拶を続けた。知事選には一切触れなかったものの、関係者の間では「知事は五選出馬を決めたのではないか」とささやかれていた。

だが、そうした動きも一月になると、急速にしぼんでいった。会合にほとんど参加しなくなったのだ。「知事はやめるようだ」。周囲からはこんな声が漏れ始めていた。

そして二月十五日。高橋知事は札幌市内で記者団に「新たな視点、新たな形で北海道のために働きたい」と述べ、参院選に出馬することを宣言した。

参院は知事の天下り先か

戦後の道政史上、最長の一六年間、知事を務めた高橋知事の功績はなんだろうか。

経済産業省出身の高橋知事は、そのキャリアと人脈を生かした新たな産業振興を掲げて二〇〇三年に初当選した。二期目には、二〇〇年に一度の改革を掲げ、支庁制度の改革に乗り出した。一四支庁体制の再編を試みたが、市町村長らの強い反対に遭い、改革は骨抜きとなった。

以降、安全運転にシフトした。裏金問題や官製談合などに直面した前任の堀達也知事のような「失点」はなかったものの、自らの信じる政策を掲げ、その実現のためには火中の栗を拾うという決意を示すことも乏しかった。

最近、誘致が議論になっているカジノなどの統合型リゾート施設（IR）については、誘致するのか否かの方針を鮮明にしている。熱心に誘致活動を展開する苫小牧市などの経済関係者からは「知事がもっと旗を振ってほしい」との注文も出ていたが、踏み出すことはなかった。与党の道議会自民党の中にも、誘致に慎重意見があり、対立を避けるためだ。

高橋知事の実績として、道財政の立て直し、観光振興などを挙げる人がいるが、これが一六年間の成果だとすれば、物足りな

いと言わざるを得ない。初当選時に掲げた新たな産業振興はどうなったのだろうか。

戦後、北海道では、高橋知事を含め六人の知事が誕生した。知事選不出馬を機に政界を引退したのは田中敏文氏と堀氏の二人。衆院議員に転進したのは横路孝弘氏。町村金五氏は参院議員を二期務めた。堂垣内尚弘氏は参院選全国区に出馬したものの、名簿搭載順位が低く、落選の憂き目にあっている。町村氏と堂垣内氏は自民党系。

高橋知事のくら替えて、自民系の知事三人はいずれも参院選に出馬することになる。高橋知事が参院議員への転身を目指すのは、抜群の知名度がある上、知事を勇退するための「花道」でもある。現在、参院議員には四人の知事経験者がいる。定数二十四人の二%未満に過ぎないが、少なくとも北海道の自民系知事にとっては、参院議員が「天下り」先になっているように見える。

北海道は今、人口減少、JR北海道の経営問題、泊原発の再稼働など、次世代へ向けて解決しなければならぬ難問が山積みだ。知事として象徴するような成果を上げられなかった政治家が、国会議員として何をするのだろうか。

△洋▽